

「二人の老女」・・狩猟民の運命

北米はアラスカの中央部、氷結したユーコン川が北から西に流路を変えるあたり、極寒の冬の始まり、アサパスカ族の小さな集団が飢餓に瀕していた。この年、ヘラジカは簡単には見つからず、カリブーも移動経路が変化したのか現れなかった。干し肉などの備蓄は底をつきつつあり、このままでは餓死する者がでる恐れが皆の頭に生まれ始めた。寒さと飢えでやせた身にカリブーの毛皮をまとった人々は秋のキャンプ地から移動を始めた。しかし、80歳と75歳の2人の老女はテントに置き去りにされた。直前の全員の集会で、手のかかるこの2人の移動の手助けはもうできない、また、わずかな食料は働き手を養うために節約しなければならない、と考えるリーダーの提案は重苦しい沈黙の中で承認されたのだった。

「二人の老女」（ヴェルマ ウォーリス著 亀井よし子訳 草思社 1995年）はこうした状況から始まる。著者のウォーリスはアラスカのアサパスカ族の一員であり、祖母から母に伝えられた2人の老女の話聞いた。実際に、飢餓はちょっとした自然の気まぐれで不定期に発生し、祖母は、その少女時代の厳しい冬に、自分は生き延びたが、飢えによって自分の母親と数人のきょうだいを失ったという。

昨年のノーベル賞は、古代人のゲノムDNAの塩基配列からヒト属の進化系統を解明してきたシュテファン・ペーボさんが受賞した。我々（ヒト＝ホモサピエンス）はどこから来たのか、ネアンデルタール人の全ゲノムの解明、ネアンデルタール人と（アフリカ以外の）ヒトの祖先の交雑の発見、デニソワ人の発見と（ユーラシア東部と太平洋の島々の）ヒトの祖先の交雑、などはわくわくする発見だった。

4万年以上前には少なくとも3種のヒト属の生き物が地球にはいたわけである。かれらはみな狩猟採集民だった。そして私たちはみな、狩猟採集民の末裔である。しかし、農耕に頼って生きていくようになって、狩猟採集民とはどんなものか、私たちは忘れていく。何千年か前に、先祖が狩猟採集民から農耕民になったときに、人々はどう変わったのか、列挙してみる。

狩猟採集民：労働時間、短い（1週間で～20時間）。（注1）

農耕民：朝から晩まで、働き続ける。勤勉。

狩猟採集民：貧乏人というものは存在しない。

農耕民：集団の中に貧富の差が生じた。

狩猟採集民：肉など栄養豊富。

農耕民：デンプンばかり、低タンパク、貧ビタミン。身長12cm減った。

狩猟採集民：ほとんどの男が子孫を残せる。

農耕民：子孫を残せない男（貧乏人など）が少なくない。

狩猟採集民：だいたい全部食べてしまう。気前がいい。

農耕民：全部食べない、保存。節約。

狩猟採集民：束縛に耐えることはしない傾向。

農耕民：束縛に耐える。従順。

これだけ見ると、狩猟採集民の方が農民よりも牧歌的でストレスが少ないように思える。しかし、頭書の「二人の老女」は、狩猟採集民の最大の問題は、餓死であることを教えてくれる。狩りの獲物も食料となる植物も自然条件のゆらぎによってときに大きく変動する。ヒトは2週間も食べなければほとんど滅びてしまう。もちろん農業も天候に左右されて、時に飢饉が発生する。しかし、狩猟採集では、獲物の備蓄が不可能でないとしても難しく、移動時に持ち運びするのも限界がある（多くの場合、狩猟採集民は獲物を求めて移動する）。したがって、その生存は自然の変動に対して農耕民よりもずっと脆弱である。～200万年前にアフリカをでたホモエレクトス（北京原人やジャワ原人）も、～40万年前にアフリカをでたネアンデルタール人やデニソワ人も、ほとんど間違いなく飢餓によって滅びた。

ヒト（ホモサピエンス）も～10万年以上前、アフリカから今のイスラエルあたりに進出したが（ハイファ周辺の洞窟遺跡）、そこから先のユーラシア大陸に進出した者は滅びたようだ（痕跡が見つからない）。その後もユーラシアに何度も進出したが、そのたびに滅びたのだろう。4.5万年前にヨーロッパに進出したヒトは4万年前までには滅びてしまったようで（ネアンデルタール人の絶滅と同じ頃である）、彼らのゲノムはその後にヨーロッパに来たヒトのゲノムに引き継がれていないという（Nature 2023年3月1日号）。数万年前には、ヒト全体の人口が1万人を下回る絶滅寸前の危機を経験している。そのころ千人数程度のわずかな人数でアフリカをでた集団は幸運にも生き延びて、ユーラシ

ア全体、南北アメリカに広がってゆく（オーストラリアには、これよりちょっと早くアフリカを脱出したらしいグループが到達している）。

ユーラシアにおいて、ネアンデルタール人（デニソワ人も）は全滅しヒトは残って繁栄した、というので、ヒトの優越性があれこれ言われる。しかし、ユーラシアに進出したヒトも全滅を経験した。おそらく何度も。それでもアフリカにはいつもヒトの母集団がいたので、くりかえし進出を試みることができて、最後になんとか生き延びてユーラシア全体に展開できたグループがいた、ということではないだろうか。アフリカに母集団のないネアンデルタール人（デニソワ人も）は一度全滅すればそれでおしまいだったのだ。

残された2人の老女はどうしたか。食料は何も残されていない。じっとしていれば、一晩のうちに寒さと飢えで動けなくなり、確実に死に至る。2人はしばらく絶望に茫然としたが、やがて励まし合って、生き延びるために戦うことにした。娘がそっと手渡してくれたヘラジカの生皮（細く引きさいて丈夫なヒモができる）と孫がこっそり残してくれたヘラジカの角で作った斧、これだけが2人の使える道具だった。さて、どうやって2人は極寒のアラスカの冬を越すことができたのか、著者のウォーリスさんは自身が畏獣だけをたよりに単独でアラスカの冬をのりきった経験が何度もあるそうで、迫真の描写でそれを教えてくれる。

注1. これは現代の（正確には、数十年前の）アフリカや南米の狩猟採集民についての調査の結果である。概して、彼らは獲物や収穫物が豊富な地域に住んでいて、文明化を拒否しても生活できる環境にある。週20時間の労働で生きていけるのはそのせいであって、もっとかつかつの環境で生きていた古代の狩猟採集民はこれとは違うかもしれない。

注2. 「昨日までの世界」（ジャレド・ダイヤモンド著 倉骨彰訳 2013年 日本経済新聞出版社）上巻第6章をみると、産業化社会と隔絶した狩猟採集集団（粗放的農耕を含む）における老人の扱いは、大事にする、遺棄する、自殺させる、殺す、など集団によってさまざまであるという。